『詩經』鄘風・蝃蝀篇の「虹」に就いて

福本郁子

（一）

『詩經』鄘風・蝃蝀篇第一章の冒頭に「蝃蝀在東、莫之敢指」の句が見える。該句は從來の殆どの注釋書で、「蝃蝀（虹）」を女子の淫奔の表象とし、それを刺るものと解釋されてきた。しかし、松本雅明が

ニジに關する毛傳以下の、夫婦や陰陽による説明は、かへつてのちに、「蝃蝀」の詩と、陰陽説の盛行とによつてみちびかれた理論であるやうに思ふ。といふのは、かかる記載があらはれるのが、「説文」「爾雅」「淮南子」など、主に漢代の資料であつて、「楚辭」九章・遠遊などに、雌蜺・雄虹の語がみえるところよりすると、戰國末までは遡るであらう。しかし「楚辭」天問に、「白蜺嬰茀、胡爲此堂」、九歌東君に、「青雲衣兮白霓裳」とあるのを見ると、虹は戰國においても、かならずしも淫佚の譬喩とはされてゐない。

と指摘する如く[1]、「蝃蝀（虹）」を一概に淫奔の表象と解することについては疑問が殘る。卽ち下に見える「女子有行、遠父母兄弟」の句は、後述する如く『詩經』中では婚姻に關する常套句である。從って該句を女子の淫奔を戒めると解釋した場合、この句との繫がりが不自然であり、從來の説は曲解と言わざるを得ないであろう。

中國や日本を始め世界各地の諸民族に於ける自然現象の虹に對する觀念に就いては、既に廣い分野で研究が爲されており[2]、虹の出現を水神の示現と見なす民族の中に、特にこれを蛇、或いは龍の表象とする觀念の存在することが報告されて

いる。虹は水神たる龍や蛇の示現であり、降雨を司り、大地に豐饒を齎すとともに、洪水や旱魃をも齎す呪力を有すると考えられた。故に虹は、人々にとって神聖視される對象であるとともに、畏怖される對象でもあったのである。

しかしこのような虹に關する研究は、『詩經』鄘風・蝃蝀篇に見える「虹」の解釋には、何等投影されてはおらず、依然旧説を踏襲して、淫奔を刺る意とする解釋が主流である。これは換言すれば、『詩經』解釋[3]の手段の一方法としての宗教學・民族學・民俗學等の補助學が完全には浸透していないことでもある。

本論は、中國に於いて雙頭の龍の示現と見なされていた呪物である虹が、大地に豐饒を齎すとともに、類感呪術的に女性に多産を齎す呪力を有するとされたことから、女性の速やかな懐妊を祈願する目的のもとに、婚姻の祝頌詩である鄘風・蝃蝀篇に謠い込まれるに至ったことを論ずる。

（二）

先ず『詩經』鄘風・蝃蝀篇の第一、第二章の全文を擧げる。[4]

蝃蝀在東　莫之敢指。
女子有行　遠父母兄弟。
朝隮于西　崇朝其雨。
女子有行　遠兄弟父母。

（○…脂部韻、●…魚之合韻）[5]

この「蝃蝀（虹）」は、從來如何に解釋されてきたであろうか。『毛序』はこの詩を、

蝃蝀、止奔也。衞文公能以道化其民、淫奔之恥、國人不齒也。

と解し、孔穎達が、

作蝃蝀詩者、言能止當時之淫奔。衞文公以道化其民、使皆知禮法、以淫奔者爲恥。其有淫之恥者、國人皆能惡之、不與之爲齒列相長稚。故人皆恥之而自止也。

と注する[6]によれば、『毛序』は、衞の文公の正しい教えによって國人が淫奔な行いを改めた詩と解釋しており、虹を淫奔の兆と見なしている。

鄭玄も、

虹天氣之戒、尙無敢指者、況淫奔之女、誰敢視之。

と[7]、虹を淫奔なる女子を戒める兆と解する。

朱熹は『毛序』の如く衞の文公と關係付けてはおらぬものの、

此刺淫奔之詩。

と、やはり淫奔を刺る詩と解している[8]。

陳奐が『後漢書』楊賜傳の李賢注引『韓詩』序に、

蝃蝀、刺奔女也。蝃蝀在東、莫之敢指、詩人言蝃蝀在東者、邪色乘陽、人君淫佚之徵。臣子爲君父隱藏、故言莫之敢指。

とあるを引くも[9]、該詩を淫奔なる女子を刺る詩とし、人君の淫佚の行いを臣下が隱蔽して暴き立てぬことを「蝃蝀在東、莫之敢指」と言うと解するものである。

魏源は『魯詩』說によって、

魯詩以蝃蝀在東、爲邪色乘陽、人君淫液之徵。臣下爲君父隱藏、故言莫敢指。則亦以爲刺宣姜詩、非文公詩矣。

と、『毛序』說を非とし、宣姜の淫佚を刺る詩と解する[10]。このように、蝃蝀篇は古來淫奔を刺る詩であると解釋されてきたのである。

「蝃蝀」は、馬瑞辰が、

瑞辰按、蝃蝀通作蝀蝀。爾雅、蝃蝀、虹也。蔡邕月令章文句曰、虹率以日西而見於東方、故詩曰、蝀蝀在東。蝀蝀二字雙聲、其合聲則爲虹。蝃蝀卽蝀蝀。

と解する[11]如く、虹の意。虹は蝃蝀（雙聲連言）を單言した語である。

「蝃蝀」の語の解釋については、『毛傳』は、

夫婦過禮、則虹氣盛。君子見戒、而懼諱之、莫之敢指。

と、夫婦が禮を誤ったことに對する戒めと解し、馬瑞辰は、

按蔡邕月令章句、爾雅釋文引郭音義竝曰、雄曰虹、古者婚禮、男先於女、此詩蝃蝀在東、莫之敢指、蓋以雄虹莫敢指、喩女有廉恥、不肯先求男也。

と、婚姻の古禮に於いては男性が女性に先んずるものであることから、「蝃蝀」は雄虹で、男性を指し、「莫之敢指」とは、女性が奥ゆかしく、自ら男性を求めたりはしないことを喩えたものと解する。

屈萬里は「莫之敢指」の句を、

今北俗戒小兒指虹、云指虹爛手指、或云指虹令人手歪。古俗蓋亦類此、不必牽附淫奔之義也。

と[12]、虹を指さすと手指が爛れるという北方に傳わる俗信を擧げ、該句はこれと同じ類のものではないかと推測する。後述する如く、これは嘗て我が國に於いても見られた一種の迷信であるが、惜しむらくはこのような迷信の生じた根底にある虹に對する概念に就いては屈萬里は一切觸れていないことである。また「不必牽附淫奔之義也」と、必ずしも淫奔の意と解するものではないとして、該詩の詩意を「此蓋既嫁之女而拒其他求婚者之詩」と、既婚の女性が他の男性からの求婚を拒絶する詩と解するも、先の「莫之敢指」の解釋がこれに如何に反映しているかが不明確である。

陳子展は蝃蝀篇の解釋では初めて甲骨資料を引用しており、「蝃蝀」を、

蝃蝀就是虹。按虹字已見於甲骨文、說虹「歙（飲）於河」、也說「貞虹隹年」「貞虹不隹年」、可見殷人以爲虹有關於雨水的多少、年收的休咎。集傳說、今俗謂虹能截雨。這句俗話的來源是很古的。虹見則雨止、所以虹被認爲不祥了。又虹有美彩、把它象徵美人和男女關係之事、也是很古的。逸周書時訓說、虹不藏、婦女不專一。釋名釋天說、虹又曰美人。陰陽不和、淫風流行、男美於女、女美於男、互相奔隨之時、則此氣盛、故以其盛時名之也。

と解釋する。[13] 虹が降雨の多少に關わるものであり、延いてはそれによる穀物の豐凶をも左右すると考えられていたと述べる點は正しいと思われるが、朱熹の說を根據にこれを不祥の兆であったと解釋するは早計であろう。また、詩意に就いても、虹を淫奔の象徵とする從來の見解から離れておらず、

蝃蝀是一篇關於婚姻自由問題的詩。詩說在一天東方有虹、西方有雲的早上、一個女子出嫁、却不曾等待父母之命、就自己作主嫁去了。旁觀的人動了多餘的義憤、作了這詩來指責她。

と、女性が父母の命を待たずに自らの意思で嫁ぐを第三者が刺る詩と解する。

高亨は、

先秦人的迷信意識、認爲虹是天上一種動物、蛇類。天上出虹是這種動物雄雌交配的現象、色明者是雄虹、色暗者是雌虹、緊緊相依、便是雄雌共眠。此詩以虹出東方比喩男女私通。

と、[14] 先秦に於いて「蝃蝀」は、蛇の一種と認識されていたと指摘するは卓見であるが、それが虹の雄雌の交配する現象であり、人間の男女が私通するに喩えたとするは、舊說の如き陰陽說による解釋の域を出てはいない。

我が國に於ける注釋書についても同樣のことが言える。目加田誠が、

虹は、淫なるものとして考えられている。雨が小止みで虹の出るような時は、大氣中に濕氣多く、いわゆる陰氣が盛んであるからだろう。

と論ずるは、[15] 陰陽說による解釋であり、また高田眞治が、

虹は晴れもせず、雨にもならぬ時に、日氣と雲氣が相犯し交わって生ずるものであるが、古代人はこれを天地陰陽の氣の淫りに交わったものとして、これを指して視ることも恥じたのである。これを以て妖にして淫なる女子に比したのである。女子はいずれ嫁いで行かねばならぬ道があって、父母兄弟から離れ行くのであるが、それをどうして正式の禮を待たないで、淫奔をするのかと、戒め刺ったのである。

と論じ[16]、また吉川幸次郎が、

にじはきれいなものとしては意識されず、天と地が男女のように交合するときに生まれるいやらしい現象として意識された。これは、虹をけがらわしいものとして厭惡する、おとなしい娘のうた。

と論ずるも[17]、同様に陰陽説による曲解で、虹を淫なるものとする根據が示されてはいない。また白川靜が、

虹は男女の發想に用いられる。……蝃蝀などをもち出すのは、邪淫をそしるような氣持ちであろう。

と論ずるも[18]、明確な根據も無いままに、舊説を無批判に踏襲して虹を淫なるもの、良からざるものとして解釋している。この點、先に引いた松本雅明の説は示唆に富んでいると言えよう。

松本は、虹を淫奔の表象とする解釋は、蝃蝀篇の詩そのものと陰陽説の隆盛によって導かれたとするが、嚴密には、『毛序』に始まる漢代經學による新たな價値觀が、虹に對する本來の概念を「淫奔」に置き換えたと言い得よう。それは農耕豫祝儀禮の歌垣の詩である鄘風・桑中篇を『毛序』が「桑中、刺奔也。衞之公室淫亂、男女相奔。至于世族在位、相竊妻妾、期於幽遠。政散民流、而不可止」と、衞の風俗が頽廢した時の淫奔の詩とし、同じく歌垣の詩である鄭風・溱洧篇を『毛序』が「溱洧、刺亂也。兵革不息、男女相棄、淫風大行。莫之能救焉」と、淫亂を刺る詩とし、また月神を祀る詩である陳風・月出篇を『毛序』が「月出、刺好色也。在位不好德、而説美色焉」と、好色を刺る詩であると解釋したように、歌垣の儀禮を淫なるものとし、神人交合の概念が根底に存する降神儀禮[19]を淫なるものとする經學的解釋と價値觀が、虹の「豐饒」「妊娠」「多産」に關わる概念を「淫奔」に置き換えたのである。虹に對する概念の何もなかった所に

「淫奔」の解釋が生じたとは考え難い。始めに「豐饒」「妊娠」「多産」に關わる概念があり、これが淫佚なるもの、惡しきものとされたが爲に「淫奔」の發想が生じたと考えられる。

(三)

では他文獻に於いては、虹は如何に記されてきたであろうか。

『淮南子』天文訓に

四時者天之吏也。日月者天之使也。星辰者天之期也。虹霓彗星者天之忌也。

とあり、「虹霓」は、高誘が『雄爲虹、雌爲蜺也。虹者雜色也』と、雄雌の虹の意と解している。雄虹・雌虹の呼稱は、主虹と副虹の別を言うものである。主虹とは、我々が一般に虹と呼ぶもので、約四十二度の角度の半徑で出現する。その外側に約五十一度の角度をした大きな虹が見えることがあり、これを副虹と言う。副虹は主虹に比べると色の配列が逆であり、また主虹ほど鮮明ではないことから、肉眼では見ることができない場合もある。[20] 高誘はこの「虹」を主虹、「霓」を副虹と解している譯である。『淮南子』の「虹霓」が、高誘の解する如く實際に雄虹、雌虹を指すものであったかは現在となっては明らかにする術はないが、何れにせよ『淮南子』の記述は、虹を不祥の兆と解釋するものである。

『釋名』釋天に、

虹、攻也。純陽攻陰氣也。又曰蝃蝀、其見每於日在西、而見於東、啜飲東方之水氣也。……又曰美人、陰陽不和、婚姻錯亂、淫風流行、男美於女、女美於男、恒相奔隨之時、則此氣盛、故以基盛時名之也。霓、齧也。其體斷絶、見於非時。此災氣也。傷害於物、如有所食齧也。

とあるは、虹の出現を淫亂の表象と見るものである。陰陽說による牽强の嫌いはあるものの、虹の氣が盛んになると淫亂の行いが流行し、異性を求めて奔走すると言うのである。また「啜飲東方之水氣也」と、虹が東方の水氣を吸うことも記

されているが、このように虹があたかも生物の如く水等を飲み、更に人間界に何等かの影響を及ぼす霊異なるものとして記述される文獻は比較的多い。

『漢書』燕刺旦傳には、

是時昭帝年十四、覺其有詐、遂親信霍光、而疏上官桀等。桀等因謀共殺光、廢帝、迎立燕王爲天子。……令羣臣皆裝。是時天雨、虹下屬宮中、飲井水、井水竭。廁中豕羣出、壞大官竈。鳥鵲鬬死。鼠舞殿端門中。殿上戸自閉、不可開。天火燒城門。大風壞宮城樓、折拔樹木。流星下墮。后姫以下皆恐。王驚病、使人祠葭水、台水。

と、上官桀が昭帝を廢して燕王を迎えようと謀り、羣臣に準備をさせていた時、虹の端が宮中に掛かり、井戸の水を飲み盡くしたとあり、飼っていた豕が總て逃げ、鳥は互いに殺し合い、また雷電による大火が城門を燒き、大風が樓閣や樹木を破壞し、流星が落ちる等の災害が起きていることから、虹の出現が大災害の前兆とされていたことがわかる。

『古今圖書集成』歴象彙編乾象典第七六卷虹霓部所引『鑑戒錄』「餌長虹」の條に、

侯弘實蒲坂人、年方十三四、嘗寐於簷下。天將大雨、有虹自河飲水。俄貫於弘實之口、其母見不敢驚焉。良久虹自天沒於弘實之口、不復出。及覺母問、有夢否。對曰、適夢入河飲水飽足而歸。母默喜、其必貴。後數月有蜀僧詣門相之、謂其母曰、此霓龍也。但離去鄉井、近江海宦者、方有顯榮。弘實後爲將領二府二鎮。皆近大江。

とあるも、大雨の後に出現した虹が河で水を飲み、それが吉祥であったことが記されており、また宋の『南部新書』卷六にも、

永貞二年三月、彩虹入潤、州大將軍張子良宅、初入漿甕水盡、入井飲之。後子良擒李錡、拜金吾、尋歷方鎮。

と、虹が張子良家の漿の甕に入り込み、水を飲み盡くした後、井戸の水を飲んだことが吉祥として記されている。『藝文類聚』卷二天部下所引『異苑』には、

晉陵薛願、義熙初、有虹飲其釜澳、響便竭。願輦酒灌之、隨投隨涸、便吐金喙滿器。於是災弊日祛、而豐富歲臻。

と、虹が薛願の家へ入り込み、釜の水を飲み干したので、薛願が酒を入れてやると、虹はこれを飲み干し、釜の中に大量の黄金を吐き出したので、薛願は裕福になったとあり、ここでも虹の出現は吉祥として記されている。

虹が人間の口中に入り込んだり、甕や釜、井戸の水を飲んだことによって、後に富や名譽を得るという話の展開は、虹が不祥とは逆の吉祥の表象とされているものであり、この點は後述する如く留意すべきである。何れも虹があたかも生物の如く水を飲むと記述されているが、これは虹が雙頭を有する龍の示現とされていたこに由來する。

『山海經』海外東經に、

　　虹虹在其北、各有兩首。一曰在君子國北。

とあり、「虹」は、郭璞が「音虹。虹、螮蝀也」とし、袁珂が「虹卽虹字之別寫」とする如く、虹の意で、これが雙頭を有していると言うのである。「各」とあるのは、主虹、副虹雙方について言うからであろう。また北宋の沈括の『夢溪筆談』異事に、

　　世傳虹能入溪澗飲水、信然。熙寧中、予使契丹至其極北黑水境永安山下卓帳。是時新雨霽、見虹下帳前澗中。予與同職扣澗觀之、虹兩頭皆垂澗中。使人過澗、隔虹對立、相去數丈、中間如隔絹縠、自西望東則見。

とあるも、虹が谷間に雙頭を垂れている様を記したものである。このように虹が雙頭の龍の示現であると考えられていたことは、甲骨文字を見れば明らかであろう。

虹を雙頭の龍とする觀念は、甲骨文字の「虹」字の字形からも窺い知ることができる。「虹」字の見える甲骨資料は總て缺損しており、殘缺部分ばかりで全文を見ることのできるものはないが、それらは以下に擧げる如くである。[21]

①王固曰、屮希。八日庚戌、屮各云自東圓母。昃亦屮出〰自北歙于河。（王固（占）ひて曰く、希屮（有）らんと。八日庚戌に、各る云（雲）、東の圓母自りする屮（有）り。昃に亦出〰屮（有）りて北自り河に歙（飲）む）

②昃亦屮設、屮出〰自北□（歙）于河。（昃に亦設くる屮（有）り、出〰屮（有）りて北自り河に〔歙（飲）む〕）

③戊□又王佳丁吉。其□未允□允𠂤設明𠂤各云、□昃亦𠂤設𠂤出〓自□於河。
④□庚吉其□𠂤設〓於西。
⑤庚寅卜古貞、〓不隹年。（庚寅卜して古貞ふ、〓は隹れ年あらざらんか）
⑥庚寅卜古貞、〓隹年。（庚寅卜して古貞ふ、〓は隹れ年あらんか）
⑦□九日辛亥旦大雨自東少□〓西□

「〓」は、郭沫若が、

〓是蜺字、象雌雄二虹而兩端有首。爾雅釋天、蟢蝀謂之雩、蟢蝀、虹也。蜺爲挈貳。蓋古人以單出者爲虹、雙出者爲蜺也。

と、「蜺」字であると解し[22]、主虹と副虹の雙方が出現するを「蜺」と言い、主虹のみが出現するを「虹」と言うとする。これに對し、于省吾は、郭沫若說を非として、

〓係虹之象形、乃虹之初文。

と、「虹」字であると解する[23]。「〓」が、「蜺」か「虹」かの問題は別としても、これが自然現象の虹を指す文字であり、その兩端に雙頭を有するものを象った字形であることは疑う餘地が無い。

「自北歓于河」については、郭沫若は、

釋名云、虹、攻也。純陽攻陰氣也。又曰蟢蝀、其見每於日在西、而見於東、啜飲東方之水氣也。……吾蜀鄉人、至今尙有虹有首飲水之說、劉熙所言蓋漢時之民話也。

と、蜀には現在も虹が水を飲むという俗信があり、劉熙が『釋名』釋天に於いて「啜飲東方之水氣也」とするは、恐らく漢代の民話であろうとする。また熊海平は、

出蜺要記載牠、就是以爲有崇。以爲是不祥。並且所謂有崇之蜺、乃是出自北方。這和現代的農諺還是一樣的、在河南

江蘇各地、有兩句通行的農諺、拿虹蜺出的方向、占驗晴雨與吉凶、東虹日頭（一作忽雷）西虹雨、南虹北虹賣兒女。意思是說虹出在南方或北方、都主不祥、必有凶年、以至於賣去兒女。可見上下三千年、這種迷信還是一樣的存在啊。

と論じ[24]、河南、江蘇兩省の農民の間には「東の虹は晴れ（或いは突然の雷）、西の虹は雨、南の虹と北の虹は子供を賣る」という諺があり、ここで子供を賣るというのは凶作を意味しており、北方の虹を凶年の兆とするは、殷代に於いて「自北飲于河」を不祥の兆とする觀念が受け繼がれたものであるとして、虹の吉凶は出現する方向によると解するのである。于省吾は、

虹霓之藏現有時、古人以藏現失時爲不祥。

と、時ならずして出現した虹が不祥とされたと論ずる。于省吾の解釋は、『禮記』月令篇に

季春之月、日在胃。昏七星中、旦牽牛中。其日甲乙、其帝大皡、其神句芒、其蟲鱗、其音角、律中姑洗、其數八、其味酸、其臭羶、其祀戸、祭先脾。桐始華、田鼠化爲鴽、虹始見。

とあり、また、

孟冬之月、日在尾。昏危中、旦七星中。其日壬癸、其帝顓頊、其神玄冥、其蟲介、其音羽、律中應鐘、其數六、其味鹹、其臭朽、其祀行、祭先腎、水始氷、地始凍、雉入大水爲蜃、虹藏不見。

と、虹の出現する季節を限定する記述があり、更に『逸周書』時訓解に、

清明之日、棟始華、又五日田鼠化爲鴽、又五日虹始見、……虹不見婦人苞亂。……小雪之日、虹藏不見、……虹不藏婦不專一。

と、出現すべき季節に虹が出現しない場合、或いは出現する季節を逸して虹が出現する場合は、婦人が淫亂になるとする記述があることによって導かれた見解であると考えられるが、これは後世の附會であり原義ではない。

我が國に於いては、白川靜は、

蜺は兩頭の虹の象を描く。虹蜺が現れるときは、陰陽が亂れて禍殃のある兆とされた。蜺が河水を飲むという民話は漢代にも傳えられている。當時の神話的な世界觀をうかがいうる刻辭である。

と論じ[25]、また赤塚忠も、

虹の原形は、前後ともに大きな口を持った龍頭になっているところから見ると、何かこれを怪異視する神話があったことであろう。「河に飲む」といえば、虹が主に夏の旱天のときの一時の驟雨のあとに現れるので、河水を飲み干す怪物とされていたのかも知れない。王の「希あらん」という占辭のあとをうけている記述であることから推すと、虹は殷代にも不吉の徵とされていたのであろう。『詩經』鄘風蝃蝀篇に「蝃蝀東にあり、これを敢て指すなかれ」とあり、また『淮南子』天文訓に『虹蜺・彗星は天の忌なり』とあるように、文獻の傳承では、虹は不吉な徵とされている。

と論ずる[26]如く、尙も虹を不祥のものとする見解を捨ててはいない。

その點、郭沫若・熊海平の說は妥當であるが、何故雙頭の龍を象った虹が水を飲むとされたかについての說明が爲されていない。後述する如く「自北歃于河」という發想は、虹を龍、卽ち水神の示現とし、水神たる虹は水から生じるものであるとする觀念を基盤に成立するものであり、「出希」「不隹年」という負の發想は、虹の有する兩義性の一面であるに過ぎない。虹の兩義性については後に詳述するが、ここで甲骨資料についてだけ言及すれば、「不隹年」の占卜は⑥の「隹年」の占卜と同一版刻上に刻まれており[27]、これは既に殷代に於いて虹に對する豐と凶の兩義性が認識されていたことを意味しているものである。

漢代畫像磚に刻まれた虹も、同樣に雙頭の龍を象っている。圖一は、河南省唐河の針織廠の墓室の畫像で、後漢初期のものとされる[28]。地下墓室の北主室頂部に、青龍、白虎、朱雀、玄武の四神、三足烏等が描かれており、その中にこの圖がある。右下部が缺損しているが、左側と同樣に龍頭があったものと思われる。圖二は、林巳奈夫の手による模寫で、山東

省肥城の孝堂山に殘る墓前の石祠に刻まれた畫像であり、後漢後期のものとされる。[29] これは屋根を支える二等邊三角形の石材の上部に配された畫像で、弧狀に胴體の兩端に龍頭が描かれ、その下の雲氣が滿ちる中に人間が座している。これらの畫像は何れも雙頭の龍を象った虹を描いたものと考えられる。

龍を象った虹が墓室内に描かれた理由は、龍が神仙思想と結びつき、死者を靈界へ運ぶ龍舟、或いは龍車とされたことと關わりがある。天と地を自在に行き來する龍が、神仙思想の隆盛に伴い、人間界と天上界を行き來する死者の乘物であると考えられたことは、湖南省長沙の子彈庫楚墓、及び馬王堆漢墓から出土した帛畫に描かれた昇仙圖からも窺い知ることができ、[30] 同樣に虹もまた雙頭の龍を象ったものであることから、昇仙に關わる圖柄として墓室内に描かれる對象たり得たのであろう。

しかし龍を昇仙の乘物とする考え方は、神仙思想との關わりから生じた概念であり、龍本來のものではない。龍本來の性質は、虹本來の性質でもある。ならば龍は本來如何に考えられていたであろうか。家井眞は龍の起源について次のように論ずる。[31]

龍はもと深山の委蛇して流れる溪流が神格化した自然神としての水神であり、その身體は蛇身がその原始的形態であった。であるから、龍は溪流が神格化して神蛇と爲り、その神蛇が更に昇華して靈獸化したものなのである。

蛇や龍が本來、水神の示現とされ、降雨を司り、大地に豐饒を齎す呪力を有するとされたことは、中國のみならず、世界各地に廣く見られる觀念である。[32]

マライ半島のキンタ・ボンク族やメニク・カイエン族では、虹は二匹の蛇が水を飲みに來たものであるとされ、雨季の六ケ月間は、この蛇がいつも空にあって、稻の生育を見守るという。

オーストラリアの北西部の諸族でも、虹を蛇と見なしており、雨や豐饒の精靈が棲むとされる水溜まりから出現し、降雨を齎すことによって大地に豐饒を、女性に子供を授けると考えられている。

北アメリカのショショニ族は、虹を巨大な天の蛇と見なしており、南アメリカでも、多くの民族が虹を巨大な水の蛇と見なし、中でもティンビラ族では、虹は二匹の蛇であり、その兩端はその蛇の各々の口であるとされている。ヨーロッパ全域にもこの觀念が存在し、東ヨーロッパでは、虹は巨大な蛇の一種であり、海や湖や川の水氣を吸って、これを雨として地上に撒くと考えられている。

我が國に於ける虹に關する俗信も數多く存在し、例えば長野縣埴科郡では、虹は蛇の吹く息であると傳えられており、琉球の新城島では、虹は大龍の化身であると傳えられている。また虹が河川や湖沼、海等の水のある所から出るとする俗信は全國的に見られるものであり、更に虹が東北地方に於いては古くは「ぬじ」と呼ばれ、これが池や沼の「ぬし」、卽ち龍神を意味する語であったとされている。このような觀念については、安閒清が次のように述べる。[33]

このように虹が龍蛇または龍蛇につながるものとして說かれていると云うことは、虹が水から出ると云う俗信の由來を解くに十分であろう。龍蛇と云うこの想像上の靈物は卽ち信仰の上では正に水の神であったのである。時あってこの水神（龍蛇）が姿を現すのが虹であると遠い古代の人々が觀じたのにちがいない。

以上により、虹が蛇、或いは龍の示現であり、水を司る水神であるが故に、大地に豐饒を齎すとともに、類感呪術的に女性に多產を齎すとする觀念が世界各地に廣く分布するものであることがわかった。それはまた水のある場所、卽ち池や河川、湖沼等から生じ、そこから吸い取った水氣を雨に變えて降雨を齎すとされた。

從って、先の甲骨資料①の辭例に見える「自北歙于河」も、虹が河から出現し、その水を雨に變えるとされたことによって生じた發想であろう。また⑤⑥の辭例に於いて「〰不隹年」「〰隹年」と、虹に同時に年穀の豐凶を占トしているのも、虹が水神であり、降雨の多少によって稔りの豐凶を左右するものとされていたからに他ならないのである。

中國に於いても虹は水神たる龍の示現とされたが故に、大地に豐饒を齎し、女性に多產を齎す呪力を有するものとして記されたのである。虹の有する水の呪力が人間に齎すとされた大地の豐饒は、延いて後世に於いては、先に引用した『鑑

戒録』『南部新書』『異苑』に記された如く、黄金や高い地位を齎すものとして描かれたのであろう。また虹の呪力が女性に多産を齎すことは、『拾遺記』巻一に、

春皇者、庖羲之別號。所都之國有華胥之洲、神母遊其上、有青虹繞神母久而方滅。卽覺有娠、歷十二年、而生庖羲。

とあり、庖羲の母親が青虹によって妊娠し、庖羲を生んだとするもので、これは虹が龍であり、龍の有する水の呪力によって女性が懐妊するという觀念による感生説話である。

『搜神後記』巻七に、

廬陵巴丘人陳濟者、作州吏。其婦秦獨在家、常有一丈夫、長丈餘、儀容端正、著絳碧袍采色炫燿。來從之後、常相期於一山澗間、至於寢處。不覺有人道相感接。如是數年、比鄰人觀其所至輒有虹。見秦至水側、丈夫以金瓶引水共飲。後遂有身生而如人多肉。

とあるは、陳濟の妻の秦という女性が、訪ねて來た男性と山の中の谷間で逢引を重ねるのであるが、その男の居る所に、いつも虹が現れるのを近所の人達が見ていた。やがて秦は身籠もり子供を生むというのである。これは人間の姿を假りた虹の精が女性を妊娠させるというもので、虹の持つ水の呪力、卽ち大地の多産、延いて女性の多産という呪力によるものに他ならない。『古今圖書集成』歴象彙編乾象典第七六巻虹霓部所引『蜀録』に、

李雄、字仲雋、特第三子、母羅氏。夢雙虹自門升天、一虹中斷、既而生蕩。後羅氏汲水、忽然如寐夢大蛇繞其身、遂有孕。十四月而生雄。常言二子若有先亡在者、必大貴。

とあるは、李雄の母羅氏が雙虹を夢にみて蕩を身籠もり、大蛇に繞りつかれるを夢にみて李雄を身籠もったという内容であるが、これは虹のみならず大蛇をもその呪力を有するとして記されているものである。或いはこれは虹が龍の示現であるとする觀念の原初的形態が殘っていたことによるのかもしれない。

虹による感生説話の基盤にあるものは、言う迄もなく龍による感生説話である。『史記』高祖本紀には、

高祖父曰太公、母曰劉媼、……嘗息大澤之陂、夢與神遇、是時雷電、……則見蛟龍於其上、已而有身、遂産高祖。

と、漢の高祖の母劉媼が龍によって身籠もり、高祖を生んだとある。これが龍の有する水の呪力が劉媼に懐妊を齎したものであることは多言を要しないであろう。虹による感生説話の發生の基盤にある懐妊の呪力は、龍による感生説話の發生の基盤にあるそれと同じなのである。

また『本草綱目』巻四十三、鱗部に

傅面、令人好顔色。又主易産。

とあるも、エドワード・H・シェーファーが、

蛟類のあるもの――鮫やワニや他の獰猛な動物――は中世中國の藥種店の店先に、その骨から採った髄を提供した。顔につければ色艶を増し、分娩の際に用いればこれを促進する効力を持った。根本的に多産肥沃の助成者であるさまざまな龍のもっとも奥に秘めた物體が、愛の誘引と、その結實を容易にすることの兩方に有益であろうことは想像に難くない。

と論ずる[34]如く、龍の有する水の呪力が女性に多産を齎すとされたことにより信じられた骨髄の効力であったのだろう。

（四）

虹が吉祥の兆とされる所以は、その水の有する呪力が齎す豐饒と多産にあることがわかったが、ならば、甲骨文中に虹を「㞢希」とし、『淮南子』『釋名』等が、虹を不祥の兆とする所以は何處に求めるべきであろうか。また、虹が吉祥と不祥という相反する性質を兼ね備える所以を如何に解釋したらよいであろうか。

水神が齎す降雨は豐饒に繋がるものであったが、その雨は同時に洪水の元でもあった。適度な雨は生活の安定を保障するが、過度の雨は一轉して人々の生活を脅かす存在となる。避け難い水の脅威は、水神の呪力が人間に齎したもう一つの

結果であると認識された筈である。ここに虹の兩義性が生じたと考えられる。つまり虹は、人間に齎す水の呪力の相反する結果により、神聖視されるとともに畏怖されもしたのである。古代バビロニアに於ける龍が、豐饒の象徴とされる一方で、河川を氾濫させる凶暴な力の象徴とされ、ここに主神マルドゥクの龍退治の神話が成立する基盤があった[35]如く、或いはオーストラリア・アボリジニに於ける虹が豐饒と創造を司る一方で、洪水と破壊をも司る象徴とされた[36]如く、中國に於ける龍もまた洪水を引き起こす凶暴な力を有するとされ、それがそのまま虹の不祥なる側面として投影されたのである。

『論衡』龍虚篇に

盛夏之時、雷電擊折破樹木、發壞室屋、俗謂天取龍、謂龍藏於樹木之中、匿於屋室之間也。雷電擊折樹木、發壞屋室、則龍見於外、龍見雷取以升天。世無愚智賢不肖、皆謂之然、如實考之、虚妄言也。

とあるは、當時、明らかに龍の凶暴性という一面が認識されていたことを示唆しており、また『西京雜記』巻二に

漢惠帝七年夏、雷震、南山大木數千株、皆火燃至末、其下數十畝地草皆燋黄。其後百許日、家人就其間得龍骨一具鮫骨二具。

とあるも、落雷による大火が龍の仕業であると考えられていたことを示しており、ここにも龍の凶暴な一面が窺える。

『南齊書』八蕭頴胄傳に

建武中荊州大風雨、龍入柏齊中、柱壁上有爪足處、刺史蕭遙欣恐畏不敢居之。

と、大風雨の際、龍の爪跡が柱壁に殘されたとあるも、龍が暴風雨を起こす凶暴な力を有すると考えられていたことによるものである。

廣西壯族自治區の壯・侗語諸族では、善龍（蛇）が善を施して人を助け、惡龍（蛇）が害を及ぼして災いを招くとされる傳承が多く、生活の安定を保障する適度な雨は、善龍（蛇）の善行の結果であるとされ、反對に生活を脅かす旱魃や洪水は、惡龍（蛇）の仕業であると考えられている[37]。これは、龍が本來有していた兩義性が分化し、龍自體が善龍と惡龍と

に分化して傳えられた結果であると考えられる。

虹に對する相反する觀念は、それぞれに分化し、これを神聖視する觀念は、既に論じた如く富みと名譽を授かる說話や感生說話を生み、これを畏怖する觀念は、漠然とこれを不祥の兆であるとする傳承を生んだ。更に、感生說話の基盤となった妊娠、多產に關わる觀念は、漢代の思想家によって淫佚なものと見なされ、虹を淫奔の兆、或いは淫奔の行いに對する戒めと解釋されるに至ったのであろう。

（五）

以上述べ來った如く、虹は本來、雙頭の龍の示現と見なされ、その水を支配する呪力は、穀物の豐凶を司るものとして神聖視され、同時に畏怖された。大地に豐饒を齎す呪力は、類感呪術的に女性に多產を齎すものと認識され、これが女性の婚姻を祝頌する興詞として定型化しつつあったものが、『詩經』鄘風・蝃蝀篇に謠い込まれているのである。興詞[38]とはも と呪謠から發生し、その神聖性が失われ、『詩經』の中で定型化したもので、原則的には二句で構成され、章の始めに位置する。その中には嘗て宗教的な事柄に關わった物や行爲、所謂呪物や呪的行爲が存在し、本來はこれに神掛けて祈願する何等かの念が働いていたと考えられる。從ってその呪物、乃至は呪的行爲が何如なる宗教的儀禮に關わっていたかを明らかにすることによって、自ずと首二句の興詞が示す意味が規定され、章全體、延いては詩全體の意味が規定される、本篇の虹は、嘗て水神たる龍の示現として神聖視される對象であり、この出現を興詞として謠い込めることは穀物の豐饒や女性の多產を祈願することであった。從って、本篇に於いて虹の興詞が規定する詩意は、穀物の豐饒祈願、または女性の多產祈願の何れかであると考えられるが、下に婚姻に關わる常套句「女子有行、遠父母兄弟」「女子有行、遠兄弟父母」が見えることから、本篇の詩意は後者の女性の多產祈願にあることが理解できよう。

以上の寫實を踏まえて蝃蝀篇を解釋する。

第一章の「蝃蝀」の解釋は既出。「莫之敢指」とは、既に屈萬里が指摘する如く、現在でも中國北方に見られる習俗で、虹は神聖な水神の示現であるので指さしてはいけないという意。この觀念は、我が國にも見られるもので、長野縣埴科郡では、昔から「虹を指さすと指が腐る」とされており、またニューギニアのダントロカストー群島にも、「虹を指させば眠っている間にその片腕がちぎれてしまう」という俗信がある等、世界の廣い範圍での分布が認められている。[39]「女子有行、遠父母兄弟（遠兄弟父母）」の「有」は、王引之が「有、語助也」とし、[40]また裴學海が「有尙于也」とするにより、[41]「于」で、「ここーニ」と訓む語助詞。「行」は、陳奐が「行、謂嫁也」とし、聞一多が「女子謂嫁一曰適、行亦猶適矣。……本篇及蝃蝀、載馳、竹竿諸篇之有行、皆謂適人耳」とするにより、[42]「嫁」または「適」で、とつぐ意。邶風・泉水篇第二章、衞風・竹竿篇第二章にもこれと同じ句が見え、錢澄之が「女子有行二句、似是當時陳語、故多引用之。……泉水、竹竿引此語、言女子分當適人、雖欲常在父母兄弟之側、不可得也」と、當時に於ける婚姻の常套句の如きものであったと論ずる。[43]

第二章の「朝隮于西」の「隮」は、林義光が「隮于西者亦虹也」とし、[44]また『周禮』春官・眡祲『九曰隮』の鄭注に「隮、虹也」とあるにより、第一章の「蝃蝀」と同義で虹の意。「于」は、裴學海が「于、在也。詩皇皇者華篇、于彼原隰」とするにより、[45]「在」で、第一章の「蝃蝀在東」と同じ句法で「あーリ」と訓む。「崇朝其雨」の「崇」は、『毛傳』に「崇、終也」とあり、これを馬瑞辰が「按傳訓崇爲終者、崇卽終之同部假借。尙書君奭篇、其終出于不祥、釋文、終、一本作崇。是終、崇古通用之證」とするにより、「終」で、「終朝」とは、毛傳に「從旦至食時、爲終朝」とある如く、夜明けから朝食時までの時間を指す。

以上の語釋により、第一、第二章を訓讀すると、

第一章　蝃蝀　東に在り、之を敢て指さす莫かれ。
　　女子　有(こと)に行(とつ)ぎ、父母兄弟より遠ざかる。

第二章　朝(あした)の隮(にじ)　西に于(あ)り、崇朝其れ雨ふればなり。
　女子　有に行ぎ、兄弟父母より遠ざかる。

となり、口語譯を施すと以下の如くになる。

第一章　東の空にタベの虹、崇高なるもの故にこれを指さしてはならぬ。
　乙女は他家へ嫁ぎゆき、父母兄弟より遠ざかる。

第二章　西の空に朝(あした)の虹、夜明けに雨が降ったせい。
　乙女は他家へ嫁ぎゆき、兄弟父母より遠ざかる。

以上により、鄘風・蝃蝀篇は、婚禮に於いて謠われた祝頌詩であり、ここに「蝃蝀（虹）」が謠い込まれたのは、その水の呪力に神掛けて嫁ぎ行く女性の遠やかな懷妊を祈願する爲のものであったことが理解されよう。

（六）

虹は本來、水神たる雙頭の龍の表象であった。その降雨を司る呪力は、人々に惠雨を齎すとともに洪水と旱魃をも齎すとされた。故に虹は、神聖視される對象であると同時に脅威の對象でもあった。ここに虹の兩義性が生じる理由があり、そこから虹を吉祥の兆とする觀念と、不祥の兆とする觀念とが分化し、その結果、樣々な傳承や俗信を生むことになった。

婚姻の祝頌詩である鄘風・蝃蝀篇に於いて虹が謠われる理由は、虹が本來、水神たる龍の示現と見なされ、その水の呪力が大地に豐饒を齎すとともに、類感呪術的に女性に多産を齎すとされたことによるものであった。

虹に關する研究は、民族學、民俗學、宗教學等の分野でかなり古くから爲されてきたが、これらの研究が、これ迄、『詩經』鄘風・蝃蝀篇の解釋に生かされなかった理由は、偏に漢代より受け繼がれた『詩』の傳統的解釋の呪縛の强さによ

るのであろう。傳統的解釋をどれだけ捨て、『詩經』の原義にどれだけ近付くことができるかが、これからの『詩經』解釋の課題であると思う。

図 1

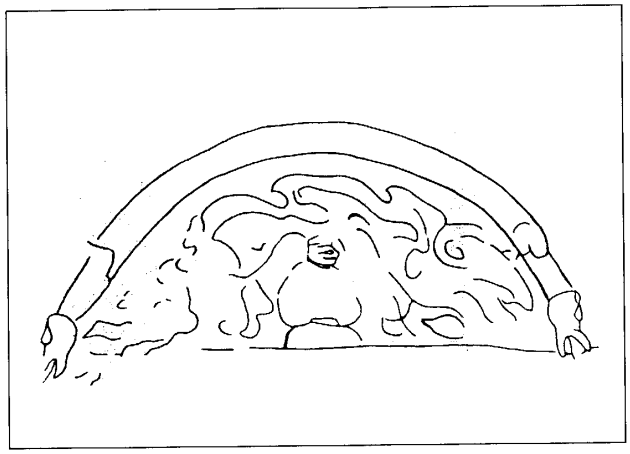

図 2

註

(1) 松本雅明『詩經諸篇の成立に關する研究』三三五～三三六頁（東洋文庫 一九五八年）。

(2) 柳田國男「青大將の起源」（筑摩書房 一九六三年『定本柳田國男集』一九集）、安閒清「虹の話」（『民族學研究』二二卷三～四號 一九五九年所收）、ニコライ・ネフスキー『月と不死』（平凡社 一九七一年）、松村武雄編、伊藤清司解說『中國神話傳說集』（社會思想社 一九七六年）、エドワード・H・シェーファー（西脇常記譯）『神女――唐代文學における龍女と雨女』（東海大學出版 一九七八年）、石川榮吉・梅棹忠夫・大林太良等編集『文化人類學事典』（弘文堂 一九八七年）、マルセル・グラネー『中國古代の祭禮と歌謠』（平凡社 一九八九年）、小島瓔禮『虹の宇宙史』（東京美術 一九九一年）、量博滿「龍と蛇――古代中國の場合――」（雄山閣 一九九二年『アジアの龍蛇――造形と象徵』所收）。

(3) ここで言う『詩經』解釋とは、嚴密な訓詁考證學の他に宗教學、民族學、民俗學等の補助學を取り入れて『詩經』の原義を解釋する立場を指し、經學的『詩經』解釋とは立場を異にするものである。

(4) 蝃蝀篇第三章「乃如之人也◎、懷昏姻也◎、大無信也◎、不知命也◎（◎…眞部）」は、一、二章と比較すると、押韻法が異なり、また句末に助字「也」を用いるなど、句型も異なっていることから、本來は成立を異にする詩の斷片が混入したものと考えられる。よって、本論は、一、二章のみを解釋の對象とする。尙、複數の詩による詩の成立に就いては家井眞「『詩經』詩篇の成立に關する一考察――周南に就いて――」（『二松學舍大學論集』第三八集　一九九五年所收）を參照とした。

(5) 押韻は、王力『詩經韻讀』一七七～一七八頁（上海古籍出版社　一九八〇年）を參照とした。

(6) 孔穎達『毛詩正義』卷三。

(7) 鄭玄『毛詩鄭箋』卷三。

(8) 朱熹『詩集傳』卷二。

(9) 陳奐『詩毛氏傳疏』卷四。

(10) 魏源『詩古微』上篇之三。

(11) 馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』卷五。

(12) 屈萬里『詩經詮釋』九三頁。

(13) 陳子展『國風選譯』一二七頁。

(14) 高亨『詩經今注』七三頁。

(15) 目加田誠『詩經譯注』一二八頁（龍溪書舍　一九九三年）。

(16) 高田眞治『詩經』二一二頁（集英社　一九六六年）。

(17) 吉川幸次郎『詩經國風』上　一八九頁（岩波書店　中國詩人選集第一卷　一九五八年）。

(18) 白川靜『詩經』一八七頁（平凡社　一九九〇年）。

(19) 『詩經』に於ける降神詩には、嘗て神と人との結婚、所謂神婚儀禮が行われていたことの窺える詩篇が多い。神婚、または聖婚は、世界各地で行われてきた儀禮であり、詳細はジェイムズ・フレイザー、ミルチャ・エリアーデ等が論ずる所である。この儀禮は大別すると、①神と神との婚姻、②神と巫覡との婚姻、③巫覡と人間との婚姻の三つに分けることができ、『詩經』に見える神婚詩は、その殆どが②に該當する。神を來臨または降臨せしめる場合、神と人とを仲介する存在、卽ち巫覡の存在が不可缺となが、巫覡は仲介者であるとともに、神に奉仕し占有される存在でなくてはならず、ここに神と巫覡との婚姻という概念が生じたものと考えられる。これが『詩經』に於ける迎神詩、送神詩が戀愛詩の形式をとる所以でもある。澤田瑞穗が「神に對する定期の奉仕すなわち祀神の儀禮にも迎神と送神との首尾二つの儀節があり、もしこれを巫歌に表現すれば迎神曲と送神曲とになる。迎神曲は神來臨の欣びを唱い、送神曲は歸りゆく神に對する戀愛悵望の情を抒べ、別離の悲哀を强調する。田多曙嵐『廣西旅行記』（民國二四年、中華書局刊）に、廣西ヤオ族の祖神とされる盤古王祭祀の實況について述べている。その祭祀のおこなわれる家にゆくと、『頭に道帽を戴き、身には繡花の紅袍を着たる巫師一人が屋の正中に立ち、口中に唸々として詞あり。また歌を善くするもの二人、手に送盤古王歌の本を捧げ、次に依りて歌唱し、音韻壯絶、泣くが如く訴ふるが如く、怨むが如く慕ふが如く、人をしてこれを聞かしめば、頓（とみ）に悲感を生ぜしむ。それまた神聖に別離するに忍びざるの意か』と。神との別離を歎き悲しむ――送神曲の本旨は、け

だしこれに盡きるであろう」と論ずる（『中國の民間信仰』工作舎 一九八二年）。『詩經』に於ける神婚儀禮については後日詳論の豫定。

(20) 『世界大百科事典』（平凡社 一九六七年）、齋藤文一著、武田康男尾寫眞『空の色と光の圖鑑』（草思社 一九九五年）。

(21) ①は羅振玉『殷虚書契菁華』四、②は曾毅公『甲骨叕存』三五、③は羅振玉『殷虚書契前編』七・四三・二、④は羅振玉『殷虚書契前編』七・七・一、⑤⑥は姚孝遂『殷墟甲骨刻辭類纂』一三四四三正、⑦は同二一〇二五。

(22) 郭沫若『卜辭通纂』三五八頁。

(23) 于省吾『甲骨文字釋林』三頁。

(24) 熊海平「三千年來的虹蜺故事」二五六頁（中山文化教育館研究部民族問題研究室編『民族學研究集刊』二期所收 一九四〇年）。

(25) 白川靜『書跡名品叢刊 殷甲骨文集』五六頁（二玄社 一九六三年）。

(26) 赤塚忠『中國古代の宗教と文化』四六九～四七〇頁（角川書店 一九七七年）。

(27) 註（21）⑤⑥參照。

(28) 『文物』一九七三年第六期（總二〇五號）所收「唐河針織廠漢畫像石墓的發掘」。

(29) 林巳奈夫『龍の話』二〇三頁（中公新書 一九九三年）。

(30) 曾布川寛『崑崙山への昇仙――古代中國人が描いた死後の世界』七八～九三頁（中公新書 一九八一年）によると、子彈庫楚墓の墓葬年代は、戰國中期と晩期の交替期頃、馬王堆漢墓の墓葬年代は、前漢初期とされる。

(31) 家井眞「龍の起源」一四四頁（『二松學舍大學人文論叢』第一二集 一九七七年所收）。

(32) 本論に擧げた世界各地に於ける虹の觀念については、註（2）の諸文獻を參照とした。

(33) 安閒清前掲論文二二七頁。

(34) エドワード・H・シェーファー前掲書、二八頁。

(35) 増田精一「オリエントの龍と蛇」一八四頁（雄山閣 一九九二年『アジアの龍蛇――造形と象徴』所收）。

(36) 石川榮吉・梅棹忠夫・大林太良等編集『文文人類學事典』五五三頁（弘文堂 一九八七年）。

(37) 覃聖敏（百田彌榮子譯）「廣西壯（チワン）・侗（トン）語諸族における龍蛇觀念の研究」一二一～一二二頁（雄山閣 一九九二年『アジアの龍蛇――造形と象徴』所收）。

(38) 興詞については、家井眞「『詩經』に於ける魚の「興」詞とその展開に就いて」（『日本中國學會報』第二七集 一九七五年所收）、「『詩經』「王事靡盬」の解釋に就いて――經學研究への提言――」（『二松學舍大學人文論叢』第五〇集 一九九三年所收）に詳細に論じられている。

(39) 安閒清前掲論文二二九～二三三頁。

(40) 王引之『經傳釋詞』卷三。

(41) 裴學海『古書虚字集釋』卷二。

(42) 聞一多『詩經通義』一九二頁（『聞一多全集二』所收 三聯書店 一九八二年）。

(43) 錢澄之『田間詩學』卷二。

(44) 林義光『詩經通解』巻四。

(45) 裴學海前掲書巻一。